瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 30
俳誌交歓 …… 31
９月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（64） …… 34
恵贈俳誌拝見（32） …… 36
特別作品「スペイン・ポルトガルの旅」… 38
「ふるさと加賀」…… 40
琥珀集作品鑑賞 …… 42
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 43
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 45
他誌転載 …… 48
妣の国父の蒼天（55） …… 50
伏見稲荷・石峰寺・藤森神社吟行 …… 52
ひこばえ会通信（23） …… 54
琵琶湖俳句サロン（１） …… 55

2013/9　第90号

今月の一句

鵙の下なげき乙女の伏身像　桂樟蹊子

（昭和六十二年作）

信州穂高町の碌山美術館を訪れられた時の作品である。荻原碌山はロダンの弟子であるが三十二歳で亡くなり作品は少ないが、この少女像「デスペア」の他にも文覚、坑夫など印象に残る作品が多い。師は特に乙女像に惹かれ句を沢山詠まれている。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

瑞西行（1）

塩路隆子

花畑の真中ゆるりと氷河カー

七月の雪美しきウォーキング

牛小屋に吊るすカウベル風涼し

ファーマーの牛を呼ぶ声夏の野に

緑蔭にあまたを醸しチーズ小屋

夏岳を映す水呑む牛の群

瑠璃鳥の声の寧らぎ麓村

PDF= 俳誌の salon

九月号光耀抄

塩路　隆子選

湖昏く変哲もなし梅雨深き　竹内　悦子
ユニセフの子の目に涙梅雨旱　笠井　清佑
八曲に一頭の龍梅雨深し　坂上　香菜
熊棚の下ゆく歩荷青嵐　鈴木　照子
夏の夜の伝統料理ラグレット　森下　康子
文字持たぬインカ盛衰夏来たる　井口　淳子
青梅雨に鳥の形の水たまり　石川かおり
涼風や波のうねりの柔らかき　増田　一代
安曇野に蛍の乱舞道祖神　宮田　香
夏霞む神島はるか鳥羽の沖　山口キミコ
緑蔭や歴史繙く無隣菴　山崎　里美
俊寛の嘆きや夏の柿落し　横田　矩子
遷宮へ夏蝶連れて詣でけり　吉田　宏之
寺縁起語る和尚の夏衣　飯田美千子
うすぎぬや絵巻へ誘ふ源氏香　伊東　和子
笹の葉に想ひの重し星の恋　伊藤　和子
萍の無抵抗なる平らかな　国包　澄子
異国語を武器の女将や葭障子　北尾　章郎

PDF= 俳誌の salon

深緑の大樹従へ塔聳ゆ　桂　敦子
お花畑牛二百頭草を食む　川崎　利子
山高く湖おほらかや滋賀の夏　笹井　康夫
苔むせる崩れ土塀や額の花　坂根　宏子
鴨川はほんにオアシス夏柳　佐用　圭子
飽食の果のひと皿水なすび　塩路　五郎
滴れる山の息づく風通ふ　田中　浅子
夏足袋の鞐ゆるめて風通す　辻　香秀
立役の黒子で通す汗の染み　津田　富司
サングラス掛けて本音を少し出す　橋本　靖子
ギヤマンに古都千年の真水汲む　秦　和子
夜光虫最終フェリー待つ港　藤見佳楠子
葉隠れに妖精のゐて七変化　中井登喜子
六月の光を封じ手術室　長濱　順子
御赦免の花は咲かぬよ佐渡の旅　中村ふく子
飛魚の影そこここに凪の海　中本　吉信
卓袱台に夫の思ひ出なすび漬　能勢　栄子
垣根越し鉄砲百合に撃たれける　高谷　栄一
炎天へ五体投地の黒き犬　常田　希望
夏霧の狭間に仄と夢の城　平井　紀夫

PDF= 俳誌の salon

太陽をぱしゃりと嬰の昼行水　松岡　和子
鉄骨のあや取り橋や夏の蝶　藤本　秀機
山里に古民家ひとつ風青し　板倉　安正
川面より吹く風そよと鵜飼舟　松田　洋子
七夕や今宵も京の寝苦しき　谷口　俊郎
梅雨寒の手足を温め仕舞風呂　粟倉　昌子
朝涼や苔を鎧へる石灯籠　辻　知代子
端居して八方美人とは馴れず　常田　創
灼くる日を威風堂々並木道　松田　和子
車窓より触れむばかりに濃紫陽花　三川美代子
白絣の人ふり返り四条筋　宮越　久子
骨董屋の親父そっくり雨蛙　宮崎左智子
蟻の列シルクロードの行脚かな　森田　利和
梅花藻の白さ可憐や水の意に　山内タカ子
雨しとど紫陽花寺の活気かな　山田　愛子
梅雨の夜の雨音をんな話すかに　山本　孝夫
水を打つ媼の柄杓自在なり　山本　丈夫
無彩色男ひとりの冷蔵庫　和田　郁子
緑蔭に推理小説読み耽る　渡部　法子
飛び入りも計算済みよ瓜冷す　和田森早苗

PDF= 俳誌の salon

打水の軒端に褪せしくくり猿　伊藤純子
箸置のガラスの鮎や夏料理　伊藤憲子
和やかに禰宜らの作る茅の輪かな　伊庭玲子
父の日や大吟醸の届けもの　大越義雄
小瀑の涼しき音色小径行き　大島みよし
ワイパーがしきりに動く梅雨深し　大谷信子
容赦なきおろしの辛さ夏大根　大松一枝
近江より錦市場へ鱧買ひに　小澤菜美
それぞれの水音響く不動滝　落合晃
掻き曇る天王山を奔る雷　片岡久美子
吹抜ける潮風テラス夏衣　木戸宏子
干し物や梅雨の晴間を使ひ切り　小林久子
夏痩せや炭水化物大好きで　西郷慶子
父の日の父昭和史を繙ける　阪本哲弘
鉛筆にキャップ被せて梅雨ごもり　杉本綾
高気圧二つのはざ間猛暑なる　鷲見たえ子
辞書を手に言葉さがしや文の月　田中久子
転げ出て畳の縁の夏蜜柑　中井弘一
冷房の利かぬ本堂僧の汗　西田史郎
公園に夏椋百羽鳴き通し　福本すみ子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

近江妙蓮　竹内　悦子

捨てきれぬグリコのおまけ梅雨籠
湖昏く変哲もなし梅雨深き
たまに来し子に鳴焼の酒肴
浄土なる近江妙蓮密やかに
合歓の花遠き記憶の子守歌
茅花風乙女の髪を撫でてゆく
二か月の嬰を抱きくぐる茅の輪かな

夏座敷　笠井　清佑

昔の香初成り胡瓜きざむとき
ユニセフの子の目に涙梅雨旱
机一つ置かるるだけの夏座敷
陽に向ふ大向日葵に翳りなし
夏帽子血管巡る塩の飴
奈良町にジャズのライブや梅雨晴間
日盛りや歩道白線歪みける

塩糀作り　坂上　香菜

朝まだきメレンゲめける蓮の花
七夕の願ひを外し一心寺
酒封じの祈願の墓や梅雨明くる
塩糀作り体験梅雨最中
手仕事の五代目染師麻衣　（吉岡幸雄氏）
八曲に一頭の龍梅雨深し
翔けさうな鳩の彫刻緑さす

PDF= 俳誌の salon

梅雨の尾瀬

鈴木　照子

梅雨荒れを「サンダーバード」北へ行く
遥か来て雨の黄菅や尾瀬ヶ原
カラフルなレインファッション梅雨の尾瀬
熊棚の下ゆく歩荷青嵐
「愛」染めて越後の宿の麻のれん
梅雨ふかし千曲ここより信濃川
青田波寄する縄文土器の里（新潟県魚沼郡）

氷河

森下　康子

夏の夜の伝統料理ラグレット
ヨーロッパ土産のワイン巴里祭
放牧のカウベル微か聴きて夏
草原やハイジ世界に浸る初夏
動かざる氷河見つめてケルン立つ
夏雪と救助犬入れハイポーズ
夏空に姿やさしきモンブラン

インカ展

井口　淳子

文字持たぬインカ盛衰夏来たる
天空都市（マチュピチュ）を空中散歩夏の霧
炎天下崖に張り出すインカ径
生贄の少女の画像夏寒き
アンデスの段々畑や新薯（いも）を掘る
つづれ織涼しアルパカコカ袋
カラフルな図柄涼しき貫頭衣（チュウニック）

（３Ｄシアターにて）

青梅雨

石川かおり

青梅雨に鳥の形の水たまり
産土の椋の大樹や夏祓
白南風に木目くつきり狛狐
血色のよき祖母の頬風涼し
花合歓や三代続く骨接ぎ師
糠床にしの字に曲がる青胡瓜
青柿や四十路越えての木婚式

PDF= 俳誌の salon

涼　風

増田　一代

涼風や波のうねりの柔らかき
色とりどりの品種改良花菖蒲
野辺の道遠く近くに雨蛙
心地よし野山潤ほす夏の雨
夕立やひと日天下のタイガース
荒梅雨の故郷無事との安堵かな
早苗のび田にたっぷりの雨あがる

蛍の乱舞

宮田　香

安曇野に蛍の乱舞道祖神
花南天英国風のガーデンに
骨董の白磁のポット新茶汲む
携帯の電波圏外青葉山
京都タワーの写る水面の未草
桟橋に日傘佳人の立姿
葉を重ね白さを競ふ女貞花

鳥羽の沖

山口キミコ

薄衣を一枚加へ旅支度
チャーター船に白波立てて夏の潮
夏霞む神島はるか鳥羽の沖
黒南風の風待ち港鳥羽の湾
傘の柄で落とす山ももよく熟れて
長旅の伊勢路の車窓合歓の花
凌宵花こぼれて径を塞ぎける

蛍

山崎　里美

要らぬもの見えなくてよし蛍の火
青田風受くる安堵や年忌終へ
緑蔭や歴史繙く無鄰菴
南禅寺に水呑む虎や木下闇
鉾立の縄の幾重を隠す織
山鉾の長刀天に突き刺さり
胡瓜生り目覚め仕事の夫の笑み

PDF= 俳誌の salon

柿落し

横田矩子

鉄線花濃き紫を極めける
雨樋の接なぎ目ずらす梅雨力
梅雨空に新歌舞伎座の屋根の反り（東京にて5句）
俊寛の嘆きや夏の柿落し
夏日影橋くぐり行く隅田川
贅凝らす岩崎邸の濃紫陽花
復元に苦心の汗や東京駅

出雲・松江の旅

吉田　宏之

青葉風出雲詣での旅姿
渓谷を過ぎて山陰青田風
遷宮へ夏蝶連れて詣でけり
楷老を願ふ柏手樟若葉
滝落つる庭も名画や障子窓
船頭の調子外れや青蛙
菖蒲湯に浸るや海へ火焔落ち

白百合

飯田美千子

黄昏の長きひと日の夏至の雨
はびこれる十薬の白際立ちて
鮎釣りの長き竿立て大堰川
凛と立つ白百合まさにガラシャかな（勝龍寺城）
寺縁起語る和尚の夏衣
人続々世界の富士の山開き
七夕の短冊重し願ひ事

宇治十帖

伊東　和子

杜つづく青葉小径に宮ふたつ
夏萩の揺れに歩を止め浮舟碑
梅雨蝶の去りたる行方夢浮橋
うすぎぬや絵巻へ誘ふ源氏香
古蹟径一草もとの落し文
いにしへの文字よみかぬる梅雨の歌碑
総角の碑の彫り深し青葉影

PDF= 俳誌の salon

蛍

伊藤　和子

垂れ葉にふうはり蛍息を継ぎ
夕闇に白きが浮ぶ半夏生草
ぐおぐおと沼の主や牛蛙
白南風に鮮やかな紋揚羽蝶
笹の葉に想ひの重し星の恋
夏草がぐんと伸びきる無人家
夜空見る嬰も児も不思議蛍狩

無抵抗

国包　澄子

団欒の声のつつ抜け青簾
箸使ひ上手も下手も心太
寝惜しみて月下美人と向き合ひぬ
萍の無抵抗なる平かな
鵜飼船傾くほどに覗き込む
あぢさゐの藍を占めたる狭庭かな
梁高き床屋の構へ風涼し

葭障子

北尾　章郎

囲を信じ離れぬ蜘蛛や強風裡
愛想良くなりし求人七変化
小学校の青田元気や登校路
異国語を武器の女将や葭障子
闇蛍会話途切るる宿の縁
遷宮を待たるるお伊勢若葉光
今更の世界遺産や山開き

沙羅の花

桂　敦子

父の日を忘れられしとぼやく声
実梅採る白衣姿の手押籠　（平安神宮）
政治家の失言重し梅雨の空
最長寿の翁逝きけり夏の星
洋館に惜しまれ沙羅の落花かな
深緑の大樹従へ塔聳ゆ
富士の山世の脚光を浴びて夏

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

古き街　平井　紀夫

我が母の白寿憩へり夏木立
薔薇の上にお伽の国や古き街　（ハイデルベルグ）
夏霧の狭間に仄と夢の城　（フイシュバンシュタイン城）
水郷に万緑の神宿りける　（リューベナウ村）
万緑の小径に遊ぶ子栗鼠かな　（ベルリンティーアガルテン）

桑の実　松岡　和子

桑の実を持ちて乗る子やくぢら号　（通園バス）
尼寺の一灯消えぬ短き夜
梅雨寒き傷夷軍人叔父の義手
溝さらへ終へて百選かくれ里
太陽をぱしゃりと嬰の昼行水

北陸路　藤本　秀機

山中温泉の大正なごり夏の宿
鉄骨のあや取り橋や夏の蝶
夏館光子遺品の舞台の衣　（森光子）
総門を潜る僧長木下闇
修業僧の正せる姿勢半夏生

鉄砲百合　高谷　栄一

青鷺の羽ばたき降りし九條池
垣根ごし鉄砲百合に撃たれける
宿願の富士に乾杯山開き
夏富士の粗き山肌神々し
口遊む「愛の讃歌」や巴里祭

夕焼けて　常田　希望

夏負けて髪の匂ひの厭はしき
炎天へ五体投地の黒き犬
夕焼けてカーブミラーを歪めけり
裁判所出て余りにも青き芝
雨吸うて茄子に内なる力かな

PDF= 俳誌の salon

九月号月評

塩路　隆子

湖昏く変哲もなし梅雨深き　竹内　悦子

周知と思われるが作者は大津の琵琶湖の近くにお住まいである。句集「ちちろ虫」にも発表されたが、多くの琵琶湖を句材にした俳句を作っておられる。琵琶湖の句なら「竹内さんにおまかせ」と思っている位で、この句もしかり。季節としては「梅雨深き」の筈の琵琶湖がただいまのところは何の「変哲もなし」という感じ方はやはり琵琶湖を知り尽くした人でなければ得られない措辞であろう。琵琶湖の優しさ、怖さを知り尽くしてこその秀句を得られた。大切にして頂きたい一句である。

ユニセフの子の目に涙梅雨旱　笠井　清佑

１９４６年国連国際児童緊急基金を略したものである。当初は戦災児の救済であったものが発展途上国の青少年や児童に対する医療給付・教育・職業訓練や母子福祉などの援助を行うようになった。本部はニューヨークであるが、東京にも事務所があり寄付金などを呼びかけている。作者はテレビの画像で涙をしている医療給付を受けられない子、また餓えた子供たちを見かけられた。空梅雨と報じられていた頃か、猛暑で一雨欲しいと願っていたころであったのかもしれない。季語「梅雨旱」を選ばれたのは最高の選択、良い句に仕上がった。

八曲に一頭の龍梅雨深し　坂上　香菜

「八曲に一頭の龍」の上五から中七にかけての盛り上がりに惹かれた。八曲と言うと八枚を繋ぎ合わせた大きな屏風である。その屏風いっぱいに躍動的な姿勢、髭を大きく張り、目は生き生きと天を仰ぎ神秘なまでに人を惹きつける魔力をもった龍が描かれている。作者は一切それを述べずに詠む人に想像させている。龍は雲を起こし雨を呼ぶと言う。「梅雨深し」の季語がよく効いており素晴らしい句に仕上がっている。感動した。

熊棚の下ゆく歩荷青嵐　鈴木　照子

ウイークデーはお孫さんの面倒をよく見ておられる作者だが、週末や休日にはご主人さまとよく旅をされる。この度も富山から長野へのコースを選ばれたようである。先ず解らなかったのは「熊棚」である。尋ねると「樹の上にあり熊が寝起きをしたり、ものを食べたりするために枝などを集めて巣のようなものを作っていると

PDF= 俳誌の salon

ころ」と言う返事が返ってきた。自分の背よりも大きな荷物を背に追う歩荷たちが、その熊棚の下を通って山を登っていたと言う。ということは何時熊に出くわすかも知れないあたりを、危険を冒して労役に携わっている歩荷たちであると理解される。「熊棚」などという言葉をはじめて聞きその大変さに感動された作者の気持ちはそのまま「青嵐」に通じるものがあったのではなかろうか。視点の良い作品である。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon